

---

# 雪のように

紀本 真利亞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雪のように

### 【Zコード】

Z3216D

### 【作者名】

紀本 真利亜

### 【あらすじ】

母親になつた有希が子供と一緒に故郷の札幌に2年ぶりに帰郷する。しかし、その土地には過去の切ない思い出が残つていた。少しずつ甦る記憶。そして過去の儂い恋。若かりしの恋で大人になつていく有希の物語。

## 過去の出会い

2007年 12月23日 PM15:15

飛行機から見える、私の故郷はただ真っ白な塊。  
私は1才になる娘と共に故郷に帰るのだ。

夫の転勤の為、故郷を離れ栃木県に移り住んで早二年。  
この二年間、一度も帰郷していない。

とにかく生活していくだけで精一杯で、子供も産まれたから尚更。  
結婚して生活していくつて事が大変な事なんだと実感させられた二  
年間もある。

今、住んでいる栃木の街は12月でもなかなか雪が降らない。

(早く実家に帰りたいなあ)

真っ白な塊を見ているとなんだかすゞく懐かしい気持ちになってしま  
た . . .

娘の礼は大人しくスヤスヤ寝ている。可愛いものだ。  
私の母も礼に逢うの大変楽しみにしてる。  
なんせ初顔合わせだから当然と言えば当然。

昨晩、母と電話で話したが、会話の話題は常に娘の礼の事だった。  
顔は私似なのか夫似なのか、夜泣きはするのかとか、その対処の仕  
方等 . . .  
母が母親としては先輩なのだから有り難くその助言を参考にするこ

とにした。

子育てと家事等で忙しくなかなか母と連絡も取れずについたので結局長電話に

なってしまった。だが心和ます時を久々に得られた時でもあった。  
最後に

「明日はお母さんが空港まで迎えにいくから」と、母は言い電話を切った。

母は私よりも礼の方に会いたいに違いない。きっとそうだ。そういう  
違いない。

ちょっと母に嫉妬しつつ、空から故郷の北海道を見つめながら昨晩  
の電話の会話を思い出していた。

「まもなくこの機は新千歳空港に着陸いたします。尚、新千歳空港  
の天候は晴れ . . . . .」

機内アナウンスがながれ、揺れの回数も少し増えてきた。

程なくして無事空港に着き、娘を胸に抱え、トロリー・バックを引きながらロビーへと

向かった。

ロビーに着き、まず搭乗受付側にある時計が目に入った。

さっそく、母を探す為、携帯電話に電源を入れ電話を掛けた。

「もしもし？お母さん？有希だけだ。今着いたよ。どう辺にいるの？」

「有希？もう着いたの？！」

「うん。もう着いた。いまどこ？」

「今ね、ロビーの真ん中辺りでお茶してたよ。」

「もうなんだ、じゃ近くだから今向かうね。」

中央に目を向けると以外に早く母を見つけることが出来た。母も周りをキョロキョロしながら探している様子だ。

母の背面から近づいて、

「お母さんっ！」

少し大きな声で話し掛けた。

母はすぐにこちらを見て私と目が合った。

しかし、母の目線はすぐさま私の胸の方へ視線を落としたのがわかつた。

娘の礼を見つけたのだ。

私に近寄り、寝ている礼の顔を母は覗き込んだ。

「良かつたねえ！有希似で！安心したわあ」

「そう？似てる？」

「似てる、似てる、おばあちゃんだよ～。」

「ゴー」しながら声を少し張り上げた。

母が寝ている礼に話掛けてるのを見ると何だか嬉しくなってきた。

(北海道に帰つてきて良かつた)  
素直にそう思えることが出来たのだ。

間もなくして母は私のトロリー バックを手に取り

「さあ、家に帰るうか。あそこの通路から行けば駐車場近いから」と言い、飲みかけのお茶をそのままにして私を車まで案内してくれた。

出口に向かう通路に入るとロビーより気温が下がってるのがわかつた。

一歩一歩進むに連れ気温が下がる。

(もう少し、暖かい格好にしてあげればよかつたな)  
と、礼に顔を向けたが相変わらず寝ている。

エスカレーターを降り、外に出た。

一面真っ白な世界。

この一年間、体が北海道の冬の寒さを忘れていたようだ。ただ寒いの一言。

とてもこの地に住んでたとは思えなかつた。

黙つても鼻から入る冷えた空気が肺を刺し、ただでさえ目が冴える。タバコの煙の様に

鼻と口から白い吐息ができる。

しかし、頭の中ではこの環境が懐かしい気分になつてゐるのがわかつた。

母が駐車場の清算を終え清算所から出てきた。

「車すぐそこだから早く乗ろ!」「う

二コ二コしながら車の有る方に指をさす。我が家は長年使つてた車、ボロボロの軽自動車が本当にすぐそこにあつた。

良くこんな近くに駐車できたなど思いながら後部座席のドアを開けた。

すると、そこにはチャイルドシートが装備されていた。母の方を向

くと、

今度は二ソノマリしながら

「お父さんが買つて昨日着けたんだよ。早く礼ちゃんを乗せなさい。  
風邪引くよー。」「

母は喋りながらハッチを開け、私のバッグを積んだ。

「お母さん、お土産も入つていてるから雑に積まないでね！」  
礼を乗せ後部座席のドアをゆっくり閉め、助手席に乗つた。

「お土産有るの？何？」

運転席に乗つてきた母は興味深々な様子。

「餃子だよ。」「

「餃子？」

と言いながらエンジンを掛けた。

「そ、宇都宮は餃子が有名なの。味はまあまあだよ。」「

「北海道の食べ物に比べれば本州の食べ物は不味いからね  
母は自慢げに語つ。

「高速で帰るの？下の道？」

餃子から話題を変える為聞いてみた。

「下で帰るよ。今4時だから丁度いいよね。」「

「丁度いいの？高速のほうが早いじゃんかあ。」「

辺りはさつきよりも薄暗くなってきた。母は車のライトを付けゆっ  
くり車を動かした。

「今ね、札幌でイルミネーションやつてるよ。今からだつたら6時  
前には大通りに着くでしょ。ね、丁度いいでしょ？」

「そうか、イルミネーションやつてるんだ。久々だなあ。見たい！

今日は天気も良いから綺麗に見えるよなー。」「

「でしょ？ー。」「

また母は自慢げに鼻で笑う。

「そういえば旦那は仕事で忙しいの？」

「忙しいみたいだよ。だから子供と一緒に帰つてきたでしょ。」「

私はそう返した。

「ここまでこっちにいるんだっけ？」

「帰りたくなつたらかかるよ、予定では1月10日位かな。」

「巧くやつてるの？」

母は痛い所を突いてくる。

「正直微妙かな。」

窓に日を移す。外はもう日が落ちて真っ暗。

「出来ちゃつた結婚だつたからねえ、今頃旦那のイヤな所とか見えてきたんじよ？」

「うん。」

「子供ももういるんだから夫婦仲良くしないといけないよ。あと、お母さんとお父さんは有希の旦那さんちょつと苦手だから今回来てホツとしたわ。」

「ははつ。」

私は苦笑いをし、また外に目をやつた。北広島市に入つたみたいだ。「あと30分位かな。有希、ゆっくり休んでいきなよ。こっちに友達沢山いるんだから。」

「うん、もちろんゆづくつしていくよ。孫の面倒宜しくお願ひします。」

札幌市街に入り、見覚えのある場所が次々と現れてきた。

(宇都宮と全然違うなあ)

私は何気に今住んでる街と比べていた。

「あつ、そこの交差点を曲がれば大通りだよ。」

私は咄嗟に声が出た。

「やつだっけ？。良く覚えてるね。有希が乗つて良かつたわ。迷うとこだつた。」

呑気な事を言いながら母はワインカーを出しゆづくつ交差点を曲がつた。

そこにはまるで宝石を散りばめた様な幻想的な世界が田に入ってきた。

夜の背景に雪で覆われた白い地面と木々。それを照らす様々な色の光。

何度見ても綺麗な光景。毎年形を変える白と黒と光の世界。見る者を癒す世界。

### 札幌イルミネーション

大通りを母はゆっくり走る。きっと礼に見せたかったのだろう。残然ながら礼はまだ寝ている。本当に良く寝る子だ。母の走る車の後ろは軽く渋滞している。そのおかげでこの綺麗な光景をゆっくり見ることができた。

長椅子に座る若い男女二人。手を繋ぎながら歩く高校生カップル。幸せそうな光景が次々目に入ってくる。車から見えた世界を放心状態に近い感じで眺めていた。

私にもこんな時期があつたんだ。

気づけば昔を少し思い出していた . . .

2001年 12月24日 PM 21:33

## クリスマス イヴ

当時、私は某電気店の販売をしていた。

「有希！やつと仕事終わったね。」

同期の香織カオリが疲れた顔つきで話しかけてきた。

香織とは高校からの友達で私の一番の友達だった。

「やつと終わつたよ。クリスマスイヴなのに仕事とか本当に有り得ないよね！」

眉間に皺を寄せながら香織に返した。

「じゃ、今日は飲み会やろ！イヴだし！有希の家で酒盛りしよう。」「いいねえ！しようか！帰りにコンビニでお酒買って帰るわ。」

右手で缶ビールを飲むかのような仕草をしながら香織にウインクした。

私は高卒でこの会社に入社しすぐに一人暮らし始めていたので香織と良く一人で酒盛りをしていた。  
更衣室で私服に着替え会社を後にした。

気温が寒いせいか、星空がやけに綺麗に見えた。

「星、綺麗だね！」

香織の方をみた。

香織は寒いのか、首を短くさせながら

「そうっつわあ～、寒いよ。」

どうでもいいのか香織に軽く流され、会社の近くのコンビニへダッシュしてしました。

「ちよひ、ひよつとまつてよーー。」

私は走る香織を追いかけた。

「コンビニに入ると

「あ～、暖かいねえ、有希。」

と肩で息をしながら私に香織は言ひ。

「こきなり走ることないでしょ、近いのこなあ。」

私は迷惑そうに言った。

「若いんだから気にしない、気にしない。それ、お酒買おひー。」

と一人お酒コーナーに向かう香織。

まあ、いつもの事と思いつつ私は雑誌「コーナーへ向かった。  
雑誌を物色していると私の携帯が鳴り始めた。

ポケットから携帯を取り出し液晶を見た。  
ヤマシタカズヨシ

山下一良と表示されていた。

「あっ、山下さんだ。」

独り言の様に呟き、電話に出る。

「はい、もしもし?」

「あう、黒田!今何してた?！」

テンションの高い男からの電話だった。

山下は元同僚で一ヶ月前に違う店舗に転勤していくとかく元氣で  
強引な四歳年上の男だ。

「別に何もしてないですよ。これから香織と一緒に酒盛りします。」

「酒飲むの?!おまえら未成年だろ?ー。」

「そんなの関係ないですよ。」

「おいおい、まあ酒なんてひとつでもいいけどよ。お前に男紹介して  
やる。」

「ええ??別にいらないですよーなんですか?ーいきなり?ー。」

「イヴの日に女二人で酒盛りは無いよー?今から向かうから場所ド

「？」

「会社近くのコンビニにいますけど。」

「じゃ、15分で着くから待つてねよー。イルミネーション見に行くから」

「マジですか？？！」

「おひ、マジだ！着いたらまた電話するからなー。お前ら帰るなよー。じゃあな。」

やつ語つて山下は電話を強引に切った。

「はあー。」

ため息が一つ出た。

「どうしたの？誰と話してたの？」

香織が心配そうに聞いてきた。

「山下から電話きた。今からイルミネーション見に行くぞって。」  
香織は目を大きくして

「ええつ？？？！」「一人で！？？」

「違うよ、男紹介してくれるって、私に。」

「相変わらず強引な奴だね、山下さんは。私帰らうかな。」  
何気に逃げようとする香織に

「ダメだよ、お前らって言つてから。うつ！で、香織もだよ。」

「最悪だあ。私、缶チューハイ一本買ってくる。酒でも飲まないとあのテンションに付いていけないから。有希も飲む？」「はい、是非頂きます。カシオレで。」

香織は再び酒コーナーに向かった。

私は正直男運が無かつた。今まで三人と付き合つたことが有つたがどれも長続きしなかつたのである。前の男も半年前に別れたばかり

だ。別に今は男が欲しかった訳でもなかつたので正直迷惑だつた。  
ちなみに香織も同じ時期に別れていた。

「はい、カシオレ。」

香織は店内で袋から買つた缶チューハイを取り出し私に渡した。

「ありがと。寒いけどコンビニの外で飲もうか。」

「そうだね。」

一人でコンビニから出て、ミニ箱の前に座り込んだ。

「酒を飲めば楽しくなるよ。」

「そうだ、意外とカツコイイ人が来るかも！」

と言いつつ乾杯した。

「イヤ、カツコイイ奴は来ないよ。山下の友達だもん。」

いきなり香織は渋い顔をして毒をはいた。

「ははっ！だよねえ。忘れてた。」

私はお酒があまり強くなかったので缶チューハイ1杯で軽く火照つ  
てきた。

「顔、赤いよお有希。いいね、1杯で酔えて」

赤い顔をした香織が言つ。

香織もお酒は強くなかった。

すると、コンビニの小さな駐車場に一台の軽自動車が入ってきた。

「あっ、来た。」

軽自動車は車を止め、運転席から山下が降りてきた。

「おひ、早く乗れ。」

山下は運転席のシートを前に出し、運転席から乗るよう指示する。

2ドアのハッチバックだから仕方ない。

「お疲れ様です。」

私と香織は山下に一応挨拶しながら私から車に乗った。助手席には男の人が座っていた。私はその男の後ろに座った。顔とかは全然見えなかつた。

香織も車に乗り込み私の隣に座り、最後に山下が運転席に戻つた。車内は暖房が効いていて暖かつた。

「イヴなのに女一人で遊んでるのやばいぞ?...」

ドアを閉めながら山下は絡んでくる。

「山下さんも男二人で遊んでるんでしょう?」

香織はすぐに反発した。

「そうそう、こいつ竹中<sup>タケナカ</sup>って言つから。」

山下はさりげなく助手席の男を紹介した。

「こんばんは。竹中です。」

香織の方を見て挨拶した。

「あつ、こんばんは山本香織です。」

香織が自己紹介した。そこには仕事をしている時の礼儀正しい香織の顔があつた。

「黒田有希です。」

私も自己紹介した。竹中と名乗る男は私の前に座つていたので香織に喋り掛けた時の横顔を一瞬しか見えなかつた。

「じゃ、イルミネーション見に行くか」  
山下は車を運転しだした。

私の職場は豊平区だったので大通りまで車で10分位で着くことが出来る。

「一人は良く遊んでるんですか？」

香織は問いかける。

「おひ、良く遊ぶよ。」

山下は運転しながら答える。

「彼女いないんですか？一人とも。」

香織の質問は続く、

「俺は永遠のアイドルだから女は作べうねえよ。」

意味不明な返答をする山下。

「彼女いたらその子と一緒にいるよ。イブだし。」

竹中は前を見ながらドリンクホルダーに置いてあつた飲みかけのカシスオレンジに口を付ける。

「カシオレ好きなの？！有希と同じだね。」

私の方を見る香織。

「へえ、カシオレ好きなの？カシオレ好きな奴に悪い奴はないよ。」

「と、言い、またカシスオレンジを口にする。

「美味しいですよねカシオレ。」

初めて私から竹中に話しかけた。

「美味しいよね。俺缶チューハイしか飲めないんだ。酒弱いし。あつ、次の交差点曲がると大通りだ。近くにどつか止める場所あるかなあ？」

竹中は山下に道を教える。

「わかったよ。車なんてその辺に止めればいいじゃん。」

交差点を曲がると綺麗な光景が見えた。

「チヨー綺麗だね。」

竹中は山下に詰つ。

「そ、うか？車ドコに止めようかな、あそこでいいか！」  
と、山下は裏路地に向かい路駐し、エンジンを切った。

竹中は車から降り、助手席のシートを前にだし、  
「狭くない？ 降りれる？」

私を気遣ってくれた。

その時、初めて竹中と田が合つた。

綺麗な色の茶髪。整った目と鼻。お酒に酔っているのか顔は少し赤かつた。私好みの可愛い系の顔だった。

「大丈夫です。降ります。」

私ちょっとと照れながら車から降り、竹中の横に立つた。

いい香りがした。

（香水何付けてるんですか？）

と聞きたかったのだが、緊張してか聞けずにいた。

運転席からも香織が出てきた。

「じゃ、行こうか。」

山下が大通りへと足を向ける。

雪が少し降ってきた。ちょっと大きめの牡丹雪。

「あっ、信号が点滅しているー。」

山下が走って横断歩道を渡る。香織もそれに続いた。

信号が赤に変わった。

私と竹中は渡れずについた。

向こう側では山下達が大通り公園の中に入つていいく。きっと私達も一緒に渡つて着いて来ていると思っていたのだろう。

「渡れなかつたね。てゆーかあいつ等、先に行つちやつたよ。」

「私に喋り掛ける。

「うん、行つちやつたね。」

「信号が青に変わり歩き始めた。

「やつぱり、クリスマスはすごい込んでいるね。あいつ等探すの時  
間掛かりそうだ、面倒くせえ。」

竹中は周りを見渡した。

周りはカップルだらけ。皆、このイルミネーションを見に来たのだ  
ろう。

(周りから見れば私達も付き合つてゐるよつて見えるのかな?)  
会つて30分位の竹中に私はそんな事を考えていた。

信号を渡り、私達も大通り公園に入った。

「竹中さんて何歳ですか?名前は何で言つんですか?」

歩きながら唐突に私は質問した。

「名前?勇だよ。竹中勇。<sup>コウ</sup>22歳です。」

美しく光に覆われた木々を見ながら答え、携帯を取り出し時間を確  
認した。

(ユウつて言つんだあ、いい名前だね。)

「今10時ちょい過ぎだから、後2時間で23歳になります。」

竹中は続けて喋った。

「明日、誕生日なんですか?」

「そうだよ。年は取りたくないね。明日仕事?」

(23歳に見えない、私とタメ位にしか見えない)  
そう思いながら

「仕事です。」

と答えた。

「大変だね、俺は明日休みだよ。ねえ、あそこに座らない?」

「...」

誰も座っていない長椅子を見つけ一人で座ることにした。

「ユキちゃんだけ？字どう書いての？今降っている雪と同じ字？」  
足を組みながら私を見る。

「希望の有る子って書いて有希です。」

「いい名前だね！」

ありきたりの返答だったが、初めて竹中の笑顔を見た。笑うと口元からチラリと八重歯が見えた。

「俺ね、雪が好きなんだ。有希ちゃんじゃないよ。この空から降つてくる雪。」

竹中は手のひらを広げると、雪が手のひらに落ちた。

「どうして？」

私は訊ねた。

「なんか儂いでしょ。」

「儂い？」

私も手のひらを広げてみた。すると雪が手のひらに落りすべく解けた。「だつてすぐ消えちゃうんだよ？雪は」

と優しい目で私を見る。

「それは自然な事でしょ？雪なんだもん。」

「雪を人に警えたら儂いよ。もしかしたら俺だけかもそう考えるの。酒飲みすぎるのかなあ？」

と竹中はタバコを取り出しに火をつけた。

「警えてみて。」

私は不思議な考え方をする竹中に興味を持つた。

「そう？頭悪いと思わない？」

「思わないよ。」

「じゃ、簡単に人じやなく恋愛で警えるよ。雪を好きな人としよう。」

雪の形が有るうちに巧くいって。でも雪はいつか解けてしまつよね？解けると失恋。形有るものいつか消えるつて事。

「へえ。」

私はまた手のひらを広げてみた。

「雪が解けると最後冷たいよね？でも段々と冷たさが無くなつてくれるでしょ？それは思い出とか振られた時の悲しい気持ちとかで譬えると、最初はショックだけど時間が経てば立ち直り、思い出は時間が経てば色褪せてく。永遠は無いつて事。どう？夢くない？」

と恥ずかしそうに竹中はタバコを横の灰皿に捨て、  
「変な話しつちゃつたね。」

と竹中は両手をポケットに突っ込んで夜空を見上げた。

私は妙に納得してしまった。

「と言つことは永遠なんてモノは無いんだ。なんか寂しいね。でも思い出とかは色褪せていかない思うけどな。」

「そうなれば良いんだけどね。」

竹中はまだ夜空を見ていた。

私も真似て夜空を見上げた。

私はこの時から竹中の事を好きになつていて。もしかしたら車から降り、田の合つた瞬間から一田惚れしていたのだろう・・・

車の窓から見た光景から私は当時の思い出に耽つていた。  
気づくと大通りも抜け、石狩街道に入る直前だった。

「お母さん、コンビニ寄ろ。ちょっと喉渴いちやつた。」

母は何かを悟ったのか、優しい声で、

「いいよ。あそこでいい？」

ホテルの一階に入ってるコンビニに立ち寄った。

「すぐ戻るから。お母さん何かいる？」

首を振る母を見て、私はコンビニに入り、すぐ車に戻った。

「何買ったの？」

「カシスオレンジ。久々に飲みたくなつたの。」

「しばらくじゃないの？お酒飲むなんて。昔、誰かさんと呑く飲んでたよね。一人ともお酒弱いくせに。」

ジロリと見てくる母。

「うん、三年振り位。お酒飲むの。」

やはり感づいてる母。追い打ち掛けるように、

「ほれ、あそこ有希が3ヶ月入院してた病院だよ。」

「もう！こつから気づいたの？もう思ひ出せないで！」

カシオレの口を開け、一口飲む。

「だつて有希、大通りでお母さん何回話しかけても返事しないのさ、寝てるのかな？って、

有希を見ても起きてるし、目が遠くを見てたから。なんとなく、ね。で、カシスオレンジでピンと来ただよ。」

流石は女の勘。

「もう、五年も経つのか。時が経つの早い早い。入院してた時の有希もユウちゃんも若かったからね。」

母も竹中の事を思い出してるみたい。私は確かにあの病院で3ヶ月入院していた。

私は20歳になっていた。

朝7時、私は目を覚ました。隣ではユウ君（竹中）がスヤスヤ寝ている。

（かわいいい。）

とても寝顔が可愛い。この寝顔は私だけの物だ。こんな事を毎朝思つていた。

私とユウ君は付き合つことになった。クリスマスイブのあの日に結ばれてしまつたのだ。

付き合つた日は12月25日。クリスマス＆ユウ君の誕生日。その日以来、私は竹中の事をユウ君と呼ぶようになった。そして、

今は毎日一緒にいる。

私の友達からは良く『ユウ君に利用されてるだけだよ。』とか、『都合のいい女だね。』とか悪く言われたが私は気にしなかつた。

私が好きならそれで良い。ユウ君は遊びのつもりでも今の私が幸せなら全然良い。その位惚れていたのだ。

私の日課は朝7時に起きてユウ君のお弁当と朝食を作ることから始まる。料理は得意ではなかったがユウ君の為なら出来たのだ。それと手紙を書く事。手紙はきっと捨てるだらうと思うけど今の所毎日渡している。。

でも今日でしばらくお弁当も手紙も渡せなくなる。

私が入院するからだ。

仕事中、たまたま重い電化製品を持った時に腰を壊してしまったのだ。会社も今日からしばらく休むことになった。

私はユウ君を起こす。

「朝だよ、起きて。」

「……おはよう。」

寝癖だらけの髪の毛がまた愛らしい。寝起きが良い事も私的にポイントが高かった。

今までの付き合った男は寝起きが悪かったからだ。

ユウ君はシャワーを浴びに行く。

朝食は毎日トーストと田玉焼きと牛乳。たまにベーコン入り。私はこれしか作れなかつた。だが文句も言わず毎日食べてくれる。お弁当もレンジでチンで出来るもの。これも毎日残さず食べてくれた。

シャワーを終え、小さな食卓につく。

「頂きます。」

トーストに囁り付くユウ君。

「今日何時に病院いくの？」

「ん？ 12時だよ。会えなくなるから寂しい？」

私はどんな返答がくるか期待した。

「もちろん寂しいよ。お見舞いとか誰かくるの？」

期待通りの返事が来て思わずニヤケル。

「お母さんが毎日来てくれるよ。で、その間、この部屋に住むよ。」

「やつぱり？じゃ、俺実家に帰らないとね。」

すべて食べ終え、牛乳を飲みながら続けた、

「俺も仕事終わったら出来るだけ毎日お見舞いに行くからね。」

予想外の発言に嬉しくなる私。

付き合つてまだ1ヶ月と少しだつたので正直不安だったのだ。入院している間に浮気しちゃうのではないか、この恋愛は終わつてしま

うのではないかと。

「本当に？」

思わず大きな声を出してしまった。

「じゃ、毎日手紙書くよ……お母さんにも言つとくから。」

「お母さんには言わなくて良いんじゃない？」

「いや、言つとくから。」

一度、ユウ君と母は会っていた。

私の成人式の時だ。

私はユウ君を私の実家に連れてつたのだ。その時のユウ君は母に対してすく愛想良く接していたので大変好評だったのだ。母はすぐに『ユウちゃん』と馴れなれしく下の名前で呼ぶ様になり、有希には勿体無いと口にしていた。帰り際にも、

「この子（有希）はすごい我がままだからだから付合いつのすい大変だよ。おかげで男と付き合つてもすぐ別れちゃうんだ。」  
と言わなくて良いことをユウ君に吹き込み、

「また遊びにおいでよ、ユウちゃん。」

好印象を持った母は優しく見送つていたのだ。

仕事に行く時間になりユウ君は着替え、玄関に向かつ。私は後を追  
い、

「暇なときはメール頂戴よ！絶対だよ！」

と我ままを毎日言つ。そして、キスをする。良く言えばラブリ  
ブなカップル。悪く言えばただのバカッフルだ。

「いってきます。」

ユウ君は笑顔を見せる。

「いってらっしゃい。」

私は右手で小さく手を振り見送る。ドアが閉まつても私は余韻に浸

つてか私はそこに少しの間いるのだ。

ユウ君の口元から八重歯が見える笑顔が愛しくて堪らなく好きで、少しでも離れるのがイヤだった。一步間違えればストーカーに成つていたかも知れない。

少しの間ユウ君の事を考え、私は入院の準備をし、母を待つた。

AM  
11 : 36

入院の準備も終え、ユウ君と一緒に撮ったプリクラを鑑賞していた。私は付き合うことになつてからプリクラを事有る度にユウ君と撮っていたのである。私自身、プリクラが好きだったのだ。そして、まだ少ない思い出を思い出していた。

ブルブルツ

私の携帯がテーブルの上で振動した。一瞬、ユウ君からメールが来たと思い、急いで携帯を開く。鼻から溜め息が出る。母からのメールだったのだ。メールの内容は今家の前に着いたから荷物をもつて早く降りて来るようとの事だつた。

(いよいよ来たか、入院するのやだな。)

に入りのペンを鞄に入れ家を出た。

( しづなづかへいの家にも帰れないんだなあ )

を降りる。そして母の車に乗つた。

「呼べ降りておなさいよー、ノロノロヒー」の子はまつたく。

「だつて入院したくなーんだもん。」

L

口を尖がらせながら私は子供みたいに言ひ。

「無い言つてゐの、入院して手術しないと治らないんだよ。我慢しなさい。」

「わかつてゐよ。はい、これ家の鍵。」

センターコンソールに鍵を置く。

「あまり部屋いじらないでよ。」

「はいはい。」

「ユウちゃんはお見舞い来るの?」

「もちろん来るよ!」

私は得意げに母の方を見てやつた。

「あら、意外と巧くいってるんだね。」

「当然だよーだ。」

母とくだらない話をしている間に病院に着いた。そして、入院の手続きをし病室に入る。4人部屋だった。私以外はみんな年配の女性。私は軽く挨拶をした。

「黒田有希です。今日からお世話になります。」

こんな挨拶で良いのかと思いながらお辞儀をした。

すると私のベットの隣のお婆ちゃんが、

「ゆづくらしていきなさいな。これ食べなさい。」

とミカンを私にくれた。

(ゆづくらしたくないよ。早く退院したいのですよ私は!…)

なんて心のなかで叫び、

「頂きます。ありがとうございます。」

と作り笑いしミカンを頂いた。

少しすると母が病室に現れ、先ほど私が挨拶したお婆ちゃん達に頭を下げ家から持つてきただるミカンを配り始めた。

(ミカンはさつき私がお婆ちゃんから貰つたよ、隣のお婆ちゃんは間に合つてゐるのに。)

その母の行動がとても滑稽で笑いを堪えるのに必死だった。  
配り終えた母が私のベットに近づいてきた。

「何ニヤニヤしてゐるの?」

「何もだよ。」

「変な子だね。この子は。」

PM 18:45

「もう時間だから帰るね、また明日来るから」  
母はそう言い帰宅の準備を仕出した。

この病院の面会時間は七時までだった。しかし時間外面会と言つ物  
が有り、七時から九時まで特別に面会が出来るらしい。その気にな  
れば母も九時まで居ることが可能なのだ。だが、時間外の面会はコ  
ウ君との時間と決めていた私は、

(早く帰れ帰れ)

心にも無いことを思いながら母を見送った。

ユウ君には時間外面会のことはすでにメールで伝えている。後は逢  
いに来てくれるのを待つだけであった。

ユウ君からメールが来た。今仕事が終わつたみたいだ。私は待つて  
いる間に手紙を書くことにした。手紙の内容はユウ君の事がこれ位  
好きだよとか、今日有つた事とか、手術するのが怖いとか、そして、  
ユウ君との今後の将来についてがほとんどだった。

PM 20:22

愛しのユウ君が病室にひつと現れた。同室のお婆ちゃん連中はもう  
寝ているみたい。

ユウ君はベットをカーテンで仕切り、隣のパイプ椅子に座る。  
「「めんね、遅くなつて。」

同室の人を気遣つて小さな声で話し掛けた。

「来てくれて有難う。」

私はベットの上で座りながら向かい合つコウ君の手を握った。

私は好きな人との一時の時間を堪能する。ただ、時間が経つのがあまりにも早い。もう九時五分前だ。

「もう行くね。」

コウ君は帰ろうとした。

「ねえ、コウ君は神様を信じる?」

突拍子の無い質問を投げかけた。

「えつ? 神様? ? 信じないよ。」

「なんで? 信じないの?」

「いるわけ無いじゃん、存在したら世の中常に平和だよ。」

現実的な答えだ。

「ちえつ、詰まんないの。」

ちょっとふくれた私。気分を害した私を見てか、キスをしてくれた。

「また、明日もくるからね。」

いつもの笑顔を見せる。私はもう二度と口だった。手紙を渡しコウ君を見送った。

それからコウ君は毎日お見舞いに来てくれた。コウ君の実家とは真反対のこの病院に時間を掛け仕事帰りに来てくれるのである。休みの日は朝九時から夜の九時まで。疲れを惜します。いつの間にか看護婦の間にも評判になっていた。そして、母にコウ君の事を毎日自慢していたのだ。

「コウちゃんと出会つてから有希は変わったね。」

母はミカンの皮を剥きながら私に語り。

「そう? 変わったかな?」

「毎日楽しそうに見えるよ。」

「毎日楽しいよ。毎日お見舞いに来てくれるし。毎日会つて話せるから。」

ユウ君に感謝しながら母に答えた。

「毎日お見舞いに来る事は難しい事なんだよ。本当に感謝しなきやならないね。良い彼氏だよ。」

母はユウ君を褒める。

もしユウ君が居なかつたら病院嫌いの私は入院することは無かつただろう。ましてや手術、体に傷がつく事が嫌いな私なら言い切れる。ユウ君が入院することを薦めたおかげなのだ。

この時の怪我はほつておくと最悪、歩行困難になる可能性があった。だから今でもユウ君に感謝している。

今日もまたユウ君が会いに来てくれた。

「明日手術だよね。気分はどう?」

「おつかないよお。」

情けない声で返事をする。

「大丈夫だよ！すぐに終わるから、心配しないの！」励ましてくれる優しい彼氏に安堵からか涙が出る泣き虫な私。

「すぐ泣かないの。手術なんて怖くないよ！」

手術が怖くて泣いてると思つてるのだろう。

「うん、わかった。」

私は笑みを作りだす。

「明日は必ずお見舞いに来てよね。」

「当たり前だよ！」

「明日の今頃の有希は麻酔で寝てるかも知れないよ、会いに来てくれてるのわからないかもだけど来てくれる？」

「心配しないの。必ず来るから。」

いつもの笑顔を見せてくれる。

最近仕事が忙しいせいか、病院に来る時間が少し遅くなっていた。この日は限られた時間で楽しい話を沢山してくれた。

手術当日、私は朝から緊張していた。やはり手術は怖い。恐怖からユウ君の帰つた昨日の夜から帰つて疲れているだろうユウ君にメ

ールをしていた。時間を気にせずにワガママな事をする私。  
たびに励ましのメールが届く。  
だが送

そして、手術の時間が来た。

それ以降の記憶は無い。気が付いたのは翌日の午後だった。

## 相思相愛

翌日、腰に走る鈍痛で目が覚めた。

ベットの横にある小さな棚の上の小さな時計に目をやつた。

AM 13:16

まだ麻酔が効いているのか体があまり言うことを利用かなかつた。すると母が病室に雑誌を持つて入ってきた。きっと売店で買つてきたのだろう。私の足元のベットの端に雑誌を広げ、ミカンを頬張り始めた。

全く私が起きたのを気づいていない様子だ。

「お母さん」

小さな声で話しかけた。これ以上大きな声が出なかつたのである。母と目が合つ。

「あつ、気が付いたんだ。調子はどう?」

手術の翌日である。調子が良い訳ない。

「腰が痛い。」

顔を顰めて呟いた。

「それもそうだ、ゆっくり寝なさい。」

なんとも他人事のように母は笑つてた。

そして私はしばらくまた眠りに着いた。  
次に目覚めたのはその日の夜だった。

母の姿は既に無く、隣のお婆ちゃんのテレビの声が聞こえてきた。テレビの声の内容が私も良く観ていたテレビとわかつたので、だいた

いの時間の把握が出来た。

間もなく看護婦さんが私の元に来て

「容態はどう?」

と言しながら私の腰から出てる管とその先にある袋状しき物を何やらいじりだしたのだ。

私はそれが排尿の管とはまだ知らなかつたのである。

「昨日も彼氏お見舞いに来てましたよ。」

テキパキ動きながら私に言つ。

「え!? 本當ですか?」

「着てたよ、でも来るのは遅かつたよ。仕事終わるの遅かつたんだねきつと。」

「全然氣づかなかつた私。」

「氣づかないよ、麻酔で寝てるんだもん。八時五十五分位だつたかな、時間ギリギリだつたよ。」

優しい笑みで看護婦は私を見て続けた。

「何かね、オドオドしてたよ、人差し指で有希さんの手チョンチョン触つてた。きつとすごい心配してたんだね。超優しい彼氏だよ、羨ましいな。」

「指でチョンチョン触つただけですか?!」

私はすぐさま想像し笑ってしまった。

「きっと、どうしたら良いのか解らなかつたんだね。正直、滑稽だつた。私ちょっと見てたんだよカーテンも開いてたし、毎日来てるからさ。可愛い彼氏だね。」

「でも五分位しかいなかつたんですね、仕事急がしかつたんだ。」

その時、私は勇君の優しさが本物である事が解つたのだ。自然と(

手術して良かつた)なんて

他愛のない事も思い始めたのである。

「私もあんな可愛くて優しい彼氏が欲しいな。」

看護婦はきっと素直な気持ちの言葉を残し病室から出て行った。  
カーテンで仕切られた簡易的な部屋で一人、神様に感謝した。

神様、ユウ君に会わせてくれてありがとう。

神様に感謝したからかユウ君が現れた。

「あれ？ もう起きてるの？ 腰大丈夫？」

何となくすごい久しぶりに聞いた声だった。実際は一日ぶりなのだが安心できる柔らかい声。

「昨日、来てくれたんでしょう？ 看護婦さんから聞いたよ。」

「そうなの？ いつも同じ仕事着で着てるから覚えられたのかな？」  
いつもの笑顔が私の腰の痛さを忘れさせた。

「昨日の私どうだった？」

「どうもこうもないよ！ すごい弱つてた。死にそうな感じだったよ！」

「死にそうだったの？！」

だから人差し指でチヨンチヨン触つてたのか。思わず看護婦さんの話を思い出し、その時想像したのと同じ想像をまたしたのだ。

「でも、仕事終わるの遅くてさ、間に合わないとと思った。車ですごい飛ばしたんだ。着いたの九時位だったもん。」

面会時間内に間に合うか間に合わないか位際どくても迷わず病院に向かってくれた事がすごい嬉しかった。

勝手な解釈だが少しでも迷いがあればきっと間に合わなかつたのではないかと私はそう思ったのだ。

「間に合いそうになかったら別にお見舞い来なくてもいいんだよ。  
事故に有つたら大変だから！ 道路とかツルツルでしょ！」

ユウ君に対する精一杯の気遣いの言葉をかけた。

「大丈夫だよ。運転には自信有るから事故ら無いよ。根拠の無い返事が返ってきた。

「とにかくいつ何時なんどきでも安全運転で！！」

「はいはい、わかりました。安全運転心掛けます。病院内に消灯を告げるアナウンスが流れる。九時になつた事を告げる。

「じゃ、もう九時だから安全運転で帰るね。」

「わかつたよ。気をつけてね。」

そしていつもの様に別れのキスをしユウ君をベットから見送る。

姿が見えなくなるとまた腰に鈍痛が走ってきた。

この日解った事。私とユウ君が相思相愛である事。たつた五分間の面会があつた事実で私はそう感じたのである。

一週間後からリハビリが始まった。もちろんこの一週間もお見舞いには欠かさず来ててくれた。

リハビリと言つてもほとんどマッサージに近かつた。それと体力回復のため病院内をうろつく事だった。

ある日、香織がお見舞いに来た。

「お久さあ～、ケーキ買ってきましたよ。」

相変わらずの顔である。

「元気してた？」

私は久しぶりの友人の訪問に感激した。

「調子はどうさ？」

「調子？まだ少し腰痛むけど段々良くなつて來たよ。」

「体の事じゃなくて彼氏の事だよ！！」

なにやらイヤらしい顔つきで私を睨む。

「別に普通だよ。」

「本当？」の前浮気調査も兼ねて山下に探しの電話したよ。聞きた  
い？」

私が入院している間にユウ君が浮気していないかわざわざ気を使つ  
て調査してくれたとの事である。私思いの優しい友人だ。

私は毎日会つていたので浮気なんてしていいのは解つていたのだが友人の折角の調査を水の泡にしたくはなかつたのでとりあえず神妙な顔付をし話を聞く事にした。

「で、どうだつたの？」

「それがさ、毎日有希のお見舞いに行つてるつて言つたのや。なんか胡散臭くない？毎日だよ？山下が言うから尙更信憑性に欠けるんだよね。」

山下の言つとは本当に信憑性に欠けるのだ。全部嘘に聞こえる。  
きつと本性は良い人だと思うのだが日頃の行いが悪いからなのだ。  
ユウ君曰く、山下は良い奴との事。だから私は本性は良い人と私は  
思う事にしてる。実際、山下の言つとおり毎日ユウ君はお見舞いに  
来てるので正論なのだ。

「そんな事言つてたんだ。」

「そう、いくらなんでも毎日は無理があるよ。毎日なんて来てない  
でしょ？」

心配そうに疑問系で聞いてくる。

私は驚きを隠せない表情を見せ、香織の顔色を伺つた。香織をカラ  
カウ事にした。

私の顔を見るや否や（やつぱり）といつ顔をし

「男なんて皆その程度なのよー結局最後に泣くのはいつも女なのさ  
！」

語尾を粗上げて続けた、

「入院してる事を良い事に・・・」

香織のテンションも下がってきた。

きつと以前の私と同様に香織も男運が悪かつたのでコウ君もその程度の男と思ったのだろう。いや、山下の友人と言うのが一番のネックだったのかも知れない。『山下の友人』山下と言つ方程式が香織の頭には成り立っていたのかも知れない。

これ以上、コウ君の事を悪く思われるのが嫌なのと香織をカラカウのが悪い気がしてきたので種明かしすることにした。

「大丈夫だよ！コウ君は毎日お見舞いに来てくれますよーだ！」  
私はアツカンベーの顔で香織に言い放った。

「は？マジで？！何じゃそれ。」

啞然とする香織に顔がたまらず可笑しかつた。

「そんな男いるの？！」

「いるよ、コウ君がそんな男だよ。」

「山下の奴、私に恥搔かせやがつて。」

山下は全く悪くはないのだがそこは山下の人柄。そんな役だ。

「いいなあ有希は。優しい彼氏がいて。今回は本物か。」

溜め息を一つ吐く香織は何とも寂しげに見えた。

「コウ君はダメだからね！」

一応念を押しとく事にした。

「竹中君はもうダメだよ。だつて毎日お見舞いに来るくらいでしょ？私なんかにもう振り向かないでしょ。」

（おいおい、まさか狙つてたの？！）

そして、自分で買つてきたケーキに手を付け始めた。

「香織にも必ず良い人見つかるよ！」

寂しくケーキを食べる香織が可愛そうに見えてきたので応援した。

「本当？！じゃ、退院したら紹介してよ！」

と冗談ぽく言い私にチョコレートケーキを紙皿に移し渡してくれた。

「こここのケーキ超美味しいんだよ。」

いつもの香織の顔に戻ったので安心した。

「六個買ってきたから一個ずつ食べよう。残りの一 個は優しい有希の彼氏様にあげよう。」

「『めん香織、コウ君甘いものダメなんだ。』

「えっ？！ケーキ食べれない人この世にいるの！？」

信じられないと言つ表情を見せ、

「じゃ、一人三個だね！」

甘いものに目を無い私と香織は意図も簡単に二三個のケーキを平らげたのである。

「ゴルセットを腰に巻いてるのでちつき食べたケーキ二個でお腹が膨れてキツかった。早く消化させるため、散歩と食後のリハビリを兼ねて香織と病院内をうろつく事にした。

「退院する日は決まったの？店の人皆心配してるとよ。

「予定では3月9日かな。」

「田にちまで決まってるんだ、順調なんだね。」

「そうだよ。その日はお父さんも来るんだ。楽しみなのさ。」

びつじつと顔を香織はした。

「「コウ君とお父さん初めて会うんだよ？コウ君もお父さんも退院する日は休み取るみたいだから舞い違いなく会つよね。」

「なかなかの策士だね有希は。」

「策士じゃないよ。成るべき事が成るだけだよ。」

「有希のお父さん怖そうな顔してるからね。その日私も来ようかな。」

「お父さんは怖くないよ！優しいよ！あと香織はその日来なくて良いし。お父さんとコウ君の初対面邪魔しそうだから。」

「ええ？？！しないよ？？」

なんて話をしばらく続けたのである。

いつもの香織との会話を久しぶりに堪能しながら病院内を一人で徘徊

徊した。

一番の友人がお見舞いに来てくれた事を心の中で感謝しながら。

## ズルイ顔

2007 12月23日 PM 19:52

私は約二年振りに実家に帰宅した。

見慣れた玄関に、靴箱、靴箱の上にある水槽、その中の熱帯魚、階段、そしてこの匂い。全てあの時と同じだった。

「ただいまっ！」

私は学生時代の時のような声で我が家に帰宅の合図を送った。学生時代と比べての違いは私がいる事と私が少し老けた事くらいだろう。

居間のドアから父が出迎えに来た。

「おおっ、『お苦労さん、お帰り。元気にしてたか！』

人相の悪い父も一矢二矢しながら私に声をかけた。

私は父に礼を抱っこさせる為、無理やり父の腕にあづけた。

「おおっ、かわいいなあ、小さい頃の有希にそっくりだな…」

両親揃つて孫馬鹿なのである。

一生懸命、礼を不器用にあやす父がとても可愛らしく見えた。父が

子をあやすのを初めて目撃したのでとても印象的だったのだ。

「きやつ、きやつ」と笑う礼も、父の事がお爺ちゃんとわかつたの

だろうか。

母も車から私の荷物を持つて玄関に入ってきた。

「さ、有希、早く上がりなさい。」

と言つた母が、田覚めている礼に気づく、

「あれえ？！ 起きたの？！」

母は父から礼を取り上げあやし始めた。

「小さい頃の有希に本当にそっくりだね！」

両親揃つて同じ言葉を発する。

居間に入ると本当に何も変わっていない。

私は小さい時からいつも座っていたソファーに腰掛け、大きくノビをした。

母親から娘に戻った瞬間だったのかもしれない。

母は礼を抱きながら父に飲み物を出すように指示した。

父は冷蔵庫からウーロン茶を出してきた。

「有希、顔が赤いぞ？ 風邪か？」

顔色を心配した父が言う。

「違うのよ、お酒飲んだのよ。車の中で。ねえー！ 礼ちゃん！」。

母が礼の顔を見ながら父に返した。

「酒？！ 有希飲むんだっけか？」

父は首をかしげた。

「よく飲んでた、でしょ！ ユウ君、と！」

礼を高い高いをしながら語尾だけを微妙に強くしながら答えた。丁度、高い高いの一一番力のいる所と語尾が重なった為だ。

「ああ！ ユウとか！ あれ酒だったのか！ ジュースだと思つてたわ。」

一人で勘違いしていた父は、ユウ君と一緒に飲んでたカシオレの缶がジュースの缶だと思つていたらしい。父はビールと日本酒しか飲まなかつたのでカクテルの存在を知らなかつたのである。

「何ならコンビニまで歩いて買ってくるか？ そのジュース。飲むのか？」

普段なら絶対に買いには行かない父が珍しく気を使う。私が実家に久しぶりに帰ってきたのが嬉しかったのか、孫の礼に会えたのが余程嬉しいのか解らないが、父のこの行動は今まであまり見たことの無い光景だった。

「大丈夫だよ。ウーロン茶で。お父さんはお酒でも飲んでて。」

私は父のその行動が嬉しかった。

それと父の口から『コウ』と言つ名前が自然に出てきたのが私の心に何かを走らした。

私の両親がコウ君という私の元彼を覚えていてくれた事が何より嬉しかったのかもしれない。

私は札幌に帰郷するという事が当時のコウ君との思い出に浸つてしまつのがわかつていていた事だ。そして、私はそれを覚悟していた。それほどこの土地にはコウ君との思い出が沢山ありすぎたのである。

私はコウ君との思い出に自然とまた浸つていつたのであった。

2002年 3月 9日 AM 8:11

今日は私の待ちに待つた退院日。前日の夜はソワソワしてなかなか寝付けなかつた。それでも朝の日覚めは早く六時には目を覚ましていた。しかし、天候は朝から生憎の吹雪。

私は病室で身支度をしていた。

(この病室とも今日でお別れか。あつ、それとこの病室内のお婆ちゃん達とも。)

挨拶でもしなければと思い、

「今日で退院する事になりました。今までお世話になりました。」と軽く挨拶をした。お婆ちゃん達は何やら良かつた、良かつたと話し始めた。

すると、

私のカバンのポケットから携帯の振動音が聞こえてきた。母からと

思いメールを見る。

案の定、母からで吹雪のため道路が渋滞している為、病院に着くのが少し遅れるという内容だつた。ちょっとガッカリしてしまつた。早く病院という隔離された場所から開放されたいと願つていたのだ。この吹雪だとユウ君も来るの遅いのかな?と心配していると、また携帯が振動した。

(あっ、ユウ君からだ!)

急いで携帯を広げ、受信内容を確認した。内容は以外にもうすぐ病院に着くみたい。

(ちょっと早くない?…またスピード出してきたのかな?…どんな運転してるんだ?…)

あまりにも私が予想していたユウ君の到着予定時間よりも一時間も早かつたので要らぬ心配をしてしまつたのだ。

そして、私は病院の玄関までユウ君を出迎えに行つたのだ。病院の1Fの受付ロビーは外来の患者、付き添いの人で朝から賑わつていて。自動ドアが開くたびに外の冷気がロビー内に吹き込んでくる。私は自動ドアの近くにある柱に立つたまま軽く寄りかかりユウ君を待つ事にした。

外は真っ白と言うか吹雪と地吹雪のせいで灰色に近く何も見えない。少し遠くから人が来ると濃い灰色のシルエットになり自動ドアの前に来ると初めてどんな人が来たか分かる程度だつた。

私は今日久しぶりにユウ君の車の助手席に乗るのがすごい楽しみだつた。運転している姿が好きだったのである。ユウ君の車はマニユアルでシフトチェンジする時の手の仕草と運転中の真剣な顔をする時の横顔が特に気に入りだつた。只、ユウ君の車は車高が低いみたいで腰の悪い今の私には少々酷かもしれない。私の予想では、ユウ君は私の次に車が好きだと思う。香織が昔言つていた事を思い出した。車と財布を大事にする男は彼女を大事にすると。まさしくユウ君の事だと思いニヤケル。どれだけユウ君の事が好きなのか私

は。全くあきれてしまう。

それとも一つ楽しみがある。昨日、お見舞いに来た時に私は手紙を渡したのだ。その返答が楽しみであったのだ。

外から一際大きな音のする車が入つてくるのが音で解つた。私はそれがユウ君の車だと私はすぐに理解した。ユウ君の車のエンジンは珍しいみたいで音が他の車と違つて解りやすかつた。車種は忘れたがスポーツカーポイ。

ちょっととして自動ドアからユウ君が入つてきた。ユウ君はすぐに私を見つけた。

「ここにいたの？ 寒くなかった？」

相変わらずのいつもの甘い香水の匂いが私の鼻を伝つ。

「全然寒くないよ！」

私は満面の笑顔で答えた。

「何そんなに喜んでるの？？」

「何もだよ！ 早く病室戻ろ！」

私はユウ君の左腕に無理やり自分の右腕を絡ませ歩く。これからユウ君と一緒に帰れると思うと自然と笑顔になつっていたのである。

「あれ？ まだお母さん達来てないの？」

「ちょっと遅れるみたい。吹雪のせいだ。誰かさんは早く来たのにね！」

何かを察知したのかユウ君はあわてて

「飛ばしてないよ！ 朝の七時くらいに家出たんだよ…」

「本当？！」

私はユウ君の目を見て嘘じやない事を確信してから

「なら宜しい。」

と答え、腕にギュッと力を入れた。

病室に入るとユウ君はソワソワしだす。きっとお父さんに会うのが怖いのだろう。そのソワソワしているのが可笑しかったので少しの

間見ていたのである。

「何、ソワソワしてるの？怖いんでしょう？」  
たまらず声をかけた。

「怖くないよ！」

その表情は明らかに強がりの顔だった。

「ちょっとタバコ吸つてくるから」

ユウ君は早歩きで病室から出て行つたのである。

ちょっととしてお母さんからメールが来た。あと五分位で病院に着くみたい。私はもうすぐ訪れるであろう、ユウ君とお父さんの対面に一人胸を躍らしていたのである。

この時の私の顔はきっとズルイ顔になっていたに違いない。

## 初対面

AM 8:22

「おまたせえ。吹雪が凄くて車が全く動かなかつたの〜」  
母が病室に少し頭と肩に雪をのせて入つてきた。

私はやつと来たかという顔をして

「もう、ユウ君きてるよ〜」

と少しばかり野次つてやつたのだ。

「ええ？！もう着てるの？早いね。ビニにいるの？」

母は周りを軽く見渡した。

「今タバコ吸いに行つてるよ。あれ？お父さんは？」

「お父さんは下で退院の受付してるよ。もう少しで上がつてくるよ」

「そつか、お父さんとユウ君ちゃんと話すかな？」

ちょっと何気に母に尋ねてみた。内心、私もちょっと心配だつたのだ。

「どうだらうね、お父さんは人見知りするからねえ」

そうなのだ。父は人見知りをするのだ。人相が悪い上に人見知りだから大抵の人には機嫌が悪そうに見える。だから初対面の人は尚更、父には話しかけにくい。

「でもユウ君ならきっと大丈夫だよ！」

「そうね、愛嬌があるからね。ユウちゃんは」

母も笑顔でそう言つた。その言葉に私は若干安心した。

「お母さん、ちょっとユウ君呼んでくるね！」

私は病室から出て少し離れた喫煙コーナーに向かつた。

この通りなれた廊下も今日で最後となると少し寂しげに感じる。そしてこの病院にも『ユウ君との思い出』が出来たと一人そんな事を考えながら廊下を歩いた。

丁度、廊下の端にあるガラスで隔離された喫煙コーナーに着いた。ガラスの外越しから中の様子を伺つた。ユウ君は一人だつたのですが見つかった。

何やら上を見上げ作れもしない煙の輪を作るので試みているみたい。でも上手く出来ない様子。ユウ君は私の存在に気づき、「なあに?」って顔をしている。何処か幼いユウ君の顔がとても愛らしく私の母性本能をくすぐるのだ。本当にこの人は私より年上なのかさえ疑問に思うくらい。でも私より確かに全然大人。考え方とか言葉使いとか。そのギャップがとてもたまらなく感じてしまう。私の心はユウ君に完全に奪われている。

私は窓越しからユウ君に  
「お父さん達きたよっ！」

つて言つたのだ。きっと中からは私の声は聞こえない。ユウ君は私の口の動きで父達が来たのを悟り慌てて喫煙所から出てきたのだ。  
「もう来たの?！」

もはやタバコの煙で輪を作っていた余裕すら感じられない。何のためにタバコを吸っていたのか。またソワソワしだした。

「もう病室にいるの?！」

「今はお母さんしかいないよ。お父さんは下で受付してゐるから」「じゃ、今のうちに行こう！」

私は（ええ?...今のうち?...どのうち?...）と心中で思い、おもわず噴いてしまった。

「どうせお父さんには今日会うんだよ。今のうちも無いよね?」  
笑いながら優しくユウ君を見た。

「いいの!」

ソワソワしたユウ君はとても滑稽だ。今日初めて見た私の知らないユウ君のソワソワした態度。これからも私がまだ知らないユウ君の一面を私にだけ見せて欲しいと心の中で思いながら、私はまた腕を組みさつき一人で歩いた廊下を今度は一人で歩いて病室へ戻つたの

だ。

廊下から病室に父がいるのが見えた。するとコウ君はピタッと歩くの止め、

「あれがお父さん？」

病室にいる父を見ながら私に小声で問いかける。

「そうだよー」

私はコウ君の顔を見たがコウ君の視線は父についていた。私の顔は一切見ないで数秒動かなく固まっていた。きっとコウ君の頭の中では色々とシミュレーションを行っているのだろう。私はコウ君が歩き出すまで待つ事にした。コウ君のタイミングで会わせたかったから。私のせめてもの心遣い。

そして、意を決したのかコウ君は歩き出した。私は親譲りの一矢一ヤした顔をして一緒に病室に入つて行つたのだ。

「おはようございます」

コウ君は母と父に挨拶をいつもより大きな声で発した。

父はコウ君の声に気づいてこちらを向いて、

「ああ、どうも」

軽くお辞儀をした。そして声は少し裏返つていた。結構フレンドリーナ対応。

それを見た母は軽く笑つてしまい口元を手で覆つて少し下を向きた笑い始めた。

私的には全く予想外の展開だつたのだ。予想では父は毅然とした態度でコウ君に接しそして距離を取りあまり喋らないだらうと思つていたのだ。それが会社のお客さんに会つ様な感じで軽く会釈をし、声も少し裏返り調だつたのだ。私は口をポツカリ開けてその数秒の出来事を見ていた。きっと父もコウ君に会つの緊張をしていたのだろう。そもそも娘の彼氏に初めて会つのだから緊張しても致し方の無い事なのかもしれない。

「初めまして竹中勇です。有希さんとお付き合いで頂いてます」

ユウ君は深々と頭を下げ連ドラ並みの挨拶をした。私はその挨拶が可笑しくて母と一緒に笑ってしまった。

「いやいや、こちらこそ有希がお世話をになります」

父はまたお辞儀をし、

「有希はワガママだから大変でしょう?」

いつかの母と同じ事を言つ。全く両親は似るのだ。

「いやー、そんな事は、、無いですよ」

ユウ君は少し考えて返した。

「何? ! 何で少し考えたのー! ?」

私はすかさずユウ君にフクレタ顔で言つてやつた。  
マズイと顔をしたユウ君は苦笑いをして誤魔化す。母だけが最初から笑つているのだった。

父もきっと母からユウ君の情報を聞いていたのだろう。時折、笑みを浮かべながらユウ君と話している。

私はその和んだ光景を見てひとまず安堵した。(良かつた、仲良くなれて)と胸を撫で下ろしていた。

そして私の頭の中は次第に昨日ユウ君に渡した手紙の返答の事で気がかりになつていったのだった。

「じゃ、そろそろ出ましょうか?」

母が父に切り出した。

「そうだな」

父は私の荷物を持ち出した。荷物と言つても私の着替えが入つてゐるカバン一つだけだ。

「あ、僕が持ちますよ」

ユウ君はすかさず声を掛けた。

「いや、大丈夫。気にしなくて良いから」

父はあっさり断り病室から出て行つた。

「緊張してるんだよ、気にしなくて良いからねユウちゃん」母が父の気分を察してか空かさずフォローを入れた。私が入院していた時読んでいた雑誌と小説を紙袋に入れながらまた続けた。  
「車の中からずっと緊張してたんだよ、お父さん」

「そうなの?」

私はやつぱりと思つたのだ。

「ずっと、ユウ君はどんな人なのか聞いてくるのさ、良い子だよつて言つても聞いてくるからわ、もう面倒くさくなつて会えれば解るよ!つて言つてやつたのさ」

笑いながら段々と母の顔はズルイ顔になつていて。私は母のズルイ顔を見て（もしかして私、お母さんに似てない?）母にソックリかもと心に思い少し恥じんでしまつた。

「少し話せたらホツと出来たと思つよ、お父さんは」

私は少し赤面しながらユウ君に言つた。ユウ君の顔もホツとした顔になつて、

「それオレが持ちますよ」

と、母が持どうとした雑誌を入れた紙袋を手に取つた。

「じゃ、宜しくね」

母は一ヶ口つしてコウ君にお願いをする。

「そうだ有希、実家に帰るの？ 有希の家にいくの？」

「え？」

私はキヨトソとして何気にコウ君の方を向いた。コウ君はまた「なあに」って顔をした。

「自分の家に帰るよ」

つて言つてやつたのだ。コウ君にフレッシャーを掛けるためだ。

「そうなの？ 大丈夫？ その腰で」

母は当然の心配をしてきた。てっきりしばらく実家に帰つて来るものだと思つていたのだろう。私はコウ君と一緒にいたいから自分の家に帰ると言つてやつたのだ。昨日渡した手紙の返答をまだコウ君から得ずに私から勝手に言つてしまつた。手紙でコウ君に問い合わせた事は一つ。一つは同棲を懇願していたのだ。そして私は母の前で強引に線を引いたのだった。本当にワガママな私。

「一人で大丈夫なの？！」

「大丈夫だよ！ コウ君がいるから！」

またコウ君の顔を見てやつた。今度はちょっとビックリした顔をしていた。母も感づいてかコウ君の方を見ていた。やはり女の勘は鋭い。

「コウちゃん、有希を宜しくね」

あつさり同棲を認めてしまつた母。コウ君に答えを求める母にコウ君は

「あ、はい大丈夫です」

コウ君もそう言わざるを得なかつたのかもしれない。

まずは一つ目の難題を私的にはクリアしたのだ。まだコウ君の本心を聞いてはいなかつたのだが。

1階のロビーに着くと私の看護を良くしてくれた看護婦さんが遠目

に入ってきた。看護婦さんも気づいてくれて手を振りながら駆け足で私達に近寄ってきた。

「退院おめでとうー有希さんがいなくなると思つと何だか寂しいなあ」

と言ひながらも顔は笑顔だつた。

「有難う御座います」

私も笑顔で答えた。

「良い彼氏だよね、羨ましい」

看護婦さんはユウ君の方を見たがユウ君はそれに気づかず何やら外の様子を伺っていた。外の天候が気になつていたのだらう。折角の看護婦さんのお褒めの言葉を聞き逃していたのだ。

そして、やつとユウ君は看護婦さんの存在に気づき軽く会釈をした。

「それじゃ、有希ちゃんお大事にね」

「はい、大事にします」

優しかつた看護婦さんは私にそつと去つてしまつた。

「それじゃ、有希、一回有希の家に寄つてからお母さん達帰るからね」

と言つて母は父の車のある駐車場に向かつ為、猛吹雪の外に消えていった。

「そうだ、ユウ君。面白い本を見つけたよ

「そうなの？」

「この前、売店で買つたんだ。とっても感動するから読んでね」

ユウ君は意外と本を読むのが好きな方だつた。ほとんど読むのは漫画本とかだけど小説もたまに読むのであつた。ユウ君にも是非読んで欲しい本だつたので買っておいたのだ。

「はいはい解りましたよ」

とっても素つ氣無い返事が返つてきたので私は軽くユウ君の腕をチ

ネットでやった。が、筋肉質の右腕は利かなかつたみたいだ。もう少し強くやってやれば良かったと思いながら、

「読むんだよ！」

と軽く声を大きくした。

「解ったよ。感動するんでしょ？泣く位？」

「私はもう涙ボロボロだったよ」

「え？！本当？」

少し驚いていた。私が本で泣くとは思つてもいなかつたのだろう。それもそうだ。映画とか借りて一緒に見ていても開始30分位で私は眠つてしまつのだ。なので活字の多い本は尚更読まないと思つていたのだろう。

「そろそろ帰るよ」

ユウ君は私に言つてきた。私は軽く頷きユウ君の左腕にすかさず自分の右腕を絡ませ家から持つてきておいたお気に入りの黒いC & amp; Dのマフラーを顔と首に巻き寒さ対策に万全を喫したのだ。

そして外に出る為、約一ヶ月お世話になつた病院を出る事にした。自動ドアが開くと想像していた寒さ以上に寒さが襲つてきた。久しぶりの外、しかも猛吹雪。か弱い私を弱らせるには十分だった。上下左右から容赦なく雪は襲つてくる。目も開けてられない。呼吸すらままならないのである。

私はユウ君の左腕を力一杯ギュッと右腕で絞めマフラーをより深く顔に多い身を出来る限り小さくしてジッと寒さに耐えていた。

「寒いよー、ユウ君

「そうか？」

「寒い、死ぬ。死ぬ」

「馬鹿だネエ、有希は。人間は簡単には死なないよ

「有希は寒い弱いのー。ちひやバイよー。」

「オレは大丈夫だよ」

「ユウ君がおかしいんだよー！」

なんてクダラナイ話をしながら猛吹雪の中ユウ君の車がある駐車場に向かつたのだ。

久々のユウ君の腕の感触、大好きな香水の香りが自然と私を安心にさせる。

を覚えている。

## 吹雪の中 武

駐車場は屋根付だった。何とか猛吹雪に耐えた私は体に付いた雪を軽く叩いて落とした。

「車はどこ辺に置いてるの？」

「あつちだよ」

駐車場はまだ病院が始まつて間もないのにびっしり埋まつていい。少し遠くにユウ君の白い車が見えた。

「あ、あつた！」

私は自然と駆け足になつて車に駆け寄つた。

「あつ、有希！走ると腰に悪いよ！」

ユウ君も駆け足になり私を追いかけたのである。

ユウ君の言つとおり確かに腰に痛みが走つた。私は歩く事にしたのだ。

「痛かつたんでしょう？」

ユウ君が優しく言つてきた。私は意味も無く口を尖がらせ得意の怒つたふりをしたのだ。本当に意味は無い。ただ、ユウ君の言つたとおりになるのが悔しかつただけなのだ。

「何怒つてんの？」

「怒つてないよ」

でも口は尖がらせたまま。ユウ君にとつてはいつもの事なので軽く流してしまつ。

「相変わらずだね、有希は」

ユウ君はキーレスで車の鍵を開けて助手席のドアを開けた。

「先に乗つてて。寒いけど」

「へいへい」

私は助手席に乗り込んだのだ。中は寒い。ホンの少し前まで走つていたのにもう車内は冷え込んでいる。そして、ユウ君はエンジンを

掛けでハツチに荷物を仕舞い運転席に乗つてきた。

「寒いね！」

「さつきまで寒くないとか言つたのに車の中では寒いんだね！」  
と捻くつてやつたのだ。

「寒い物は寒いの！」

ユウ君も言い放つ。

「そうかい、そうかい」

私は笑いながら一人の空間を味わつていた。

兎に角、何となく懐かしく感じる車の芳香剤。初めて乗つた時を思い出してしまつた。初めてのデートは小樽で映画を見に行つたのだ。当時、話題だつた邦画で私は緊張しまくりだつたのを覚えている。そして、観覧車を二人で乗り初めてキスをした事も思い出し一人一ヤついてしまつっていた。

「何ニヤニヤしてるの？」

「いいのー！」

私の思い出にふけつているのを邪魔をしたので軽く一括したのだ。

「あっ、ごめんなさい」

いつの間にか私の方が上に成つていた。

「そうだ！手紙の返事は？！」

私はユウ君に聞いてみた。一つは同棲の事でもう一つの返事を聞いてみたのだ。

「それは帰つてから話すよ

「なんだ。ケチ」

「ケチつて何さーちゃんと話すから待つてなさい」  
「はあい」

また口を尖がらせたのだった。相変わらずワンパターンの私。

「それじゃ、そろそろ出ますよ

「安全運転でね！けが人が乗ってるんだから」

「はい解りましたよ。安心して乗つてくださいね」

車からは私のお気に入りの音楽がかかってきた。それはバラードで  
とつても良い歌だ。今でもこの歌を聴くとユウ君の事やこの時を鮮  
明に思い出す。今の私にとっては忘れられない歌。そして、あまり  
聞きたくない聞けない歌なのだ。

「この歌良いよね？好きになつたぞ」

ユウ君は運転しながら私に言つてくれる。

「でしょ？誰のお蔭？」

「有希さんです」

ユウ君は結構、音楽系には乏しいのである。この歌が流行ったのは  
当時より4年位前の歌だったのである。

「詩が最高だね」

私はメロディーが好きだった。詩の内容は一の次である。  
「私の事も抱きしめたくなる？」

唐突にこの歌の内容と同じ事を聞いてみたのだ。

「教えないよ」

「なんだよ。ケチ！」

またまた口を尖がらせたのであつた。

駐車場から出ると外はまだ吹雪いていたのである。本当に先が全く  
見えない。私なら運転できない状況だ。

「見えるの？？」

「ん？見えないよ」

なんて当たり前のような返事をしてきたのだ。

「ちょっと、大丈夫なの？」

「大丈夫だよ」

何を根拠に言つてるのか解らなかつた。ただ、万が一事故が起きて  
もユウ君と一緒になら良いとそんな浅はかな事を思つていたのも覚え

ている。

私はただ黙つて吹雪のせいで何も見えない前とたまにユウ君の横顔を見ていた。そしてたまにギアチェンジをする左手を触つては怒られていた。これからはユウ君と一人で生活していけるという事に少し酔いしれていた。そして私に睡魔が襲い掛かる。でも仕方が無い事なのだ。これほど一緒にいて安心できる人はいなかつたのだから。

ふと目が覚める。

車の中で私一人になつていてる事に気が付いた。私はいつの間にか寝ていた様だ。車内は暖房が利いていて暖かく少しばかりうるさいエンジン音と振動だけが私の中に入つてくる。外の吹雪も先ほどよりは收まりつつあって今止まつている場所がコンビニだという事が解つた。

自然と私の目がユウ君の姿を探す。「タバコでも買つているのかな？」と思いつつコンビニの店内に目をやつた。レジにそれっぽいのを見つけた。その人はお会計を済まし駆け足でコンビニから出てきた。その人がユウ君である事は自動ドア付近で完璧に判明した。

その時だつた。

外に出た瞬間にユウ君は転んでしまつた。それはアニメのように豪快に宙を舞つたのだ。そして背中から落ちた。

私は思わず吹いてしまつた。

「ハハッ！」

車内で私の笑い声だけが留まる。

背中を打つたにも関わらずユウ君はすぐに起き上がりつて私の存在に気が付いた。

何やらこっちはに向かって言つているが窓が閉まつてゐる為聞き取れない。また駆け足で車の中に入ってきた。

「何笑つてゐのさー！」

ユウ君も笑いながら少し照れくさそうに言つて來た。

「ユウ君、今宙に舞つていたよ！」

「つるさいね！大丈夫の一言もないの？！」

「あつ、ゴメンゴメン。大丈夫？」

「雪が積もつていたからね、意外と痛くなかったよ」

兎に角、私は可笑しすぎて暫く笑いが止まらなかつた。

「で、何買つたの？」

「カシスオレンジとタバコだよ。今日は有希が退院した記念日だから夜祝おうと思つてね」

その言葉は嬉しかつたがまだ笑いが止まらない。

「笑いすぎだから。もう！」

「私お酒あまり飲めないよ。医者に控えるように言われたから知つてるよ。でも一口だけでも飲んでね」

「解つたよー」

やつと笑いも收まつてきた。

「それとHも暫く出来ないからね！」

「知つてます！」

ユウ君はタバコだけ取つてカシスオレンジの入つた袋を私に渡してきた。

「そうだ！退院記念日にプリクラを取りに行こう！」

「え？！有希のお父さん達、家で待つてゐんでしょう？大丈夫？」

「大丈夫！気にしないの！」

私はどつてもワガママだからユウ君はプリクラを取りに行かざるを得なかつたのだ。

「お父さん達が勝手に私の家に行つてゐるんだから関係ないよ  
私はそう言い放ち少しだけ寄り道をする事にしたのだった。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3216d/>

---

雪のように

2010年10月10日21時41分発行